対人関係把握の方法

松村康平

対人関係は、次のような観点から、分類することができる。

① その関係が、公式的であるか、非公式的であるか。（関係の担い手である個人に即していえば、個人が関係を規定し、関係を発展させる可能性が、非公式的関係において大である。個人に対する関係の優位は、公式的関係において著しい。）

② その関係が、課題解決を中心として展開するものであるか。

③ 情緒的結合を中心として展開するものであるか。

④ 役割結合を中心として展開するものであるか。

⑤ 力関係（協力と競争、支配と服従など）を中心として展開するものであるか。

⑥ 距離関係（親密と疎遠）を中心として展開するものであるか。

⑦ 力と距離の複合的関係（親密と反撥の関係、葛藤関係）を中心として展開するものであるか。

⑧ その関係が、関係の担い手である各個人相互におけるどのような関係把握の仕方を中心として、展開するものであるか。この関係把握の仕方は、更に、次のように分類することができる。

a. 一者関係的把握。対人関係を自己関係的に把握する仕方である。

b. 二者関係的把握。対人関係を他者関係的に把握する仕方である。

c. 三者関係的把握。対人関係を「間」関係的に把握する仕方である。

d. 多者関係的把握。対人関係を網状的（個・集団的）に把握する仕方である。

対人関係は、①から⑧に述べた観点のどれを主として把握されるかによって、異なる意味が付与される。その一つの観点から把握さ

れることが、他の観点から把握されることによって付与される意味を著しく変動させるものほど、基本的次元における把握とみるならばそれは⑧である。①から⑦の観点により把握される対人関係は、それが一者的か二者的か三者的か多者的かで、意味するところが異なってくる。

以下、保育者と幼児との対人関係を、⑧の観点からとらえて、叙述しよう。

幼児との対人関係における一者的把握

対人関係を自己関係的に把握する保育者がいる。その人においては、対人関係の担い手としての幼児の存在が認められていない。この把握の仕方が、具体的には幼児に対するどのような態度として、あらわれるであろうか。

その人の幼児に対する態度を、その対人関係の外から「観客」としてとらえると、それは、幼児を保育者にひきよせる態度である。あるいはまた、幼児をつきはなしている態度である。保育者自身の意識としては、幼児のためを思う保育者である。幼児はこうあらねばならないと思い、そうならないことがあっても、こうなるはずだと思っている。

幼児に「わかりましたか。わかりましたか。わかったら、はいとおっしゃい。はい、って、おっしゃい。はい、と、いうのです。」と、きめつける保育者がありはしないであろうか。そのような関係を幼児と結ぶ保育者は、一者関係的である。

「子どもたちが、さわいで、しかたがないのですけれど。どうしたらよいでしょうか。」と、その保育者にたずねると、「わたしは、こうしています。いつも、どんなときでも、そうしています。」「じっと、だまって、子どもの前に立っています。しずまるまで、そうしています。」と、答える保育者もまた、一者関係的でしばしばある。その保育者の前にいる子どもは、昨日の疲れが残っているためにそうなっているのかもしれないし、明日のお祝いがうれしくて、いきいきしていて、さわがしくなっているのかもしれない。そういう子どもでもある可能性を、展開させ得る関係が結ばれていない。そこでは保育者の自己関係的把握が支配的である。

一者関係的把握を脱却するためには、どうしたらよいであろうか。幼児が、保育者の思うようには振るまうものでないことを体験的に把握することが、望ましい。

特定の図版（たとえば、日本版ＣＡＴ図版）を用いて、洞察体験をもたらす方法がある。保育者自身が、図版に反応する。次に、対人関係の担い手であるその幼児はどのように反応すると思うか、その幼児の立場になって反応する。つまり、その幼児の役割をとって反応する。その後に、幼児自身の反応をもとめて、この三つの反応に対すると、対者における関係認識の、変革される場合がしばしばある。

今・ここにおける対人関係の担い手である幼児との関係が、保育

者の一者関係的把握により切断されて、その関係を保育者がまた回復しようとするとき、その幼児がどのように振るまうかを予測して、実際に回復のおこなわれたとき、予測しないもののあったことを体験することも、一者関係的把握を脱却するのに、効果的であろう。

幼児との対人関係における二者的把握

対人関係を他者関係的に把握する保育者は多い。二者関係的把握は、極めて一般的な把握の仕方である。保育者と幼児、先生と生徒、親と子というような把握は、保育者における二者的把握を意味していることが多い。

対立する他者としての幼児を保育する。幼児との対人関係における保育者が、その関係の発展をはかることによって他者としての幼児の保育をすすめるなら、幼児一人・保育者一人の関係においては、好ましいことである。しかし、次のような場合には、好ましいとは必ずしもいえない。

二者的把握が、転換の困難な勾配関係を担う場合である。この場合には、勾配関係に規定された他者関係の展開がおこなわれる。そのことによって、幼児の自発的な自己保育活動が、関係的に展開されにくい。また、幼児一人・保育者一人という二者存在をこえて、三者以上存在する場合にも、二者的把握がなされているならば、関係の発展が阻害される。

勾配関係に規定された二者関係が、相互媒介的に発展するようになるためには、どうしたらよいであろうか。保育者が、幼児との受容関係を結ぶようにすることが望ましい。非指示的カウンセリングにおける相談担当者の態度を、保育者が、幼児との対人関係において活用する。

二者関係的把握を脱却するためには、どうしたらよいであろうか。三者関係的把握への転移を容易にすることである。

三者関係的把握への転移は、三者の存在することによって容易である。現実に二者が存在するとき、その一者が、三者関係的把握をなすことは可能であるが、しかし、現実に三者の存在するほうが、容易である。現実に三者の関係を発展させ、それを反映的にとらえることができるからである。相談の場面においては、三者面談法を採用して、被治療者における三者関係的把握のもたらされるように意図することがある。

保育者が、保育場面において、特定の幼児との対人関係を結ぶ場合に、そこには、その幼児の所属する集団とその幼児と保育者との三者関係が成立していると把握するならば、既に二者関係的把握を脱却していることになる。三者関係的把握は、小集団の指導には、欠くことのできないものである。

劇化（心理劇）と対人関係の把握

保育における幼児たちとの対人関係は、多者関係的把握によって、発展するであろう。

多者関係的把握は、どのようにしてもたらすことができるか。三

者関係的把握について述べたように、現実に三者が存在して、その関係が反映的にとらえられることが、三者関係的把握を容易にすると同様、多者の存在が重要である。しかし、多者の存在は関係的把握を困難にもする。そのため、多者関係的把握を容易にするための場面設定が、必要とされる。「劇化」（心理劇）は、このことに役立つであろう。

心理劇の演出にあたって必要なものは何か。演者・補助自我・監督・観衆・舞台の五つが、主なものである。心理劇は、相談治療の方法として、生活指導の方法として、また、対人関係の研究法として、活用することができる。

演者は、劇における主役である。演者は、俳優としてではなく、自分自身であるように、つまり、その私的世界がえがかれるように、振るまう必要がある。思いのままに、自発的に行為する。補助自我は、共演者とよんでもよい。監督の手足となって働くだけでなく、演者（主役）の補助役でもある。監督は、劇の演出をしながら、助言者としての役割も、診断をくだしながら治療者としての役割も果たす。観衆は、演者（主役）を、あるときは助け、あるときは演者に助けられて、劇に参加する。ただの傍観者ではない。演者に力をかすのは、主に、一般常識の提供者としてである。あまりにも空想的な世界に演者がひたってしまうことに対して、観衆の存在はそれをひきとめ、現実とのつながりを気づかせるのに役立つ。舞台は、みせる演技をするために設けられるのではない。自発的な演技を導きだすためにある。演者にとって、あまりに現実的であっても、非現実であっても、不適当である。あまりに現実的だと、日常生活と類似のものになって、自由度を低める。あまりに非現実的であると、緊張解消には役立ったとしても、舞台での行為を現実の生活にもたらして、実践に役立てる道が、つきにくい。

心理劇において、舞台の上であることにとらわれず、演者になり補助自我になり、監督になり観衆になることは、多者関係的把握を育てるのに役立つ。監督の役割だけをとり続けていたのでは、よい監督であることもできない。特に重要なのは、どのようにすぐれた監督であっても、今・ここで振るまった演者の体験を内容的に体験できないことである。観衆においても、観衆自身を舞台上にみるというかたちで演者から影響を受けるが、それは、演者の体験とは異なるものである。しかも、今・ここでの心理劇の共通体験をもち、それを基盤としてそれぞれの役割体験が異なることを把握する。

対人関係把握の方法として、心理劇は優れている。多者関係の展開する心理劇の舞台では、一者・二者・三者の関係把握も可能である。

保育における小集団指導の重要性、役割技法の有効性が認識されるようになってきた今日、それを実践するためには、保育者における心理劇的体験が必要であろう。

＊　＊　＊

（お茶の水女子大学）